雷石榆『沙漠の歌』

――中國詩人の日本語詩集――

北岡正子

はじめに

一九三五年東京で、日本語による處女詩集『沙漠の歌』を出した雷石榆は、日本語詩人として日中文學交流史に特異な位置を占める。

三三年春櫻の頃來日してから、日本を追放された數か月を挾んで、三六年晩秋歸國するまでの、雷石榆の三年餘の詩作には、同時代の日本と中國の、時潮に抗う詩精神が反映されている。この數年は、中國に於ては、新詩歌運動が、左翼作家聯盟（以下、左聯と略稱）の活動が嚴しく封じられたのに伴ってほとんど閉塞狀態に陷っていた時期、一方、日本に於ては、プロレタリア文學運動崩壞後、創作方法の組織的束縛から解放され、諷刺と抵抗の精神の漲ぎる一種ルネッサンス的な活氣ある詩作の場が、曲がりなりにも出現していた時期に當たる。

雷石榆（一九一一～一九九六）は、廣東省臺山縣の出身、臺山中學卒業後『臺山民國日報』副刊編集の職に就いたが、マルクス主義理論に關する文章を書いたことを理由に解雇され、その後、日本に留學した。來日前、かな文字と少しばかりの語彙を習ってはいたが、まず、東亞高等豫備學校に通い日本語を學び、中央大學に籍をおいた。[1]

雷石榆來日後の五月二七日、同盟員の創作活動を「唯物辯證法的創作方法」によって規制した日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）指導部に批判的なグループが、組織外で雜誌『文化集團』を創刊した。これは、翌三四年二月、「合法的發表機關を中心とする創作グループとしての活動」[2]に移るべきことを提案してナルプが解散し、引き續いて三四年から三五年にかけて、『文學評論』『關西文學』『詩精神』『文學案內』等々の雜誌が簇出して、文學界に活況をもたらす先驅けをなしたものである。

一方、左聯東京支部再建の任務を密かに帶びて來日した林煥平・魏晋等により、三三年暮、左聯東京支部が再建される。翌三四年、日本に於けるナルプ解體と時を同じうして、その文藝運動が始まる。[3]この春、雷石榆も、魏晋・林爲梁・林煥平等數人と文藝活動を開始した。[4]閉もなく、蒲風が來日する。彼等の活動は急速に廣まっていったのだろう、すでに二十人程いたという在京の詩友が集まり歡迎の座談會を開いた。[5]魏晋・林爲梁・林煥平は、左聯東京支部再建のメンバー、魏晋・林爲梁は中央大學の同學、林爲梁・林煥平は臺山縣の同鄕である。また、蒲風は、廣東省梅縣出身、新詩歌運動を推進した中國詩歌會の發起人の一人、上海で機關誌『新詩歌』の編集に携わった經歷をもつ。その後、雷石榆とともに、『詩歌』によって活動することにな

る。彼等の大部分は、二十代前半の若者であった。

日本に來て初めて手を染めたと言える雷石檍の詩作は、一方で、中國の新詩歌運動の流れに連なり、一方では、抑壓と侵略に抵抗する中國・臺灣・朝鮮等の文學者達との連帶をはかる、日本の詩人達の活氣に溢れる詩作の場によって、育まれたものである。中國で塞き止められた新詩歌運動が、再建された左聯東京支部の文藝運動に流れこみ、雷石檍が編集した機關雜誌『詩歌』に命脈を繫いで甦ったことについては、既に別稿で述べた。[6] そこで、本稿では、日本に於ける雷石檍の、詩・飜譯・詩論・詩評等の制作や詩歌の懇談會への參加等も含めた、總稱して「詩活動」と名づけられるものに眼を移し、その最初の成果である日本語詩集『沙漠の歌』について述べようと思う。

一　『詩精神』との出會い

雷石檍の日本での詩活動は、日本追放の期閉（三五年冬～三六年三月）を境に、前後二つの時期に分けられる。前期にみられる顯著な特徴は、雷石檍の詩活動が、雜誌『詩精神』の同人、臺灣文藝聯盟東京支部の友人、共に左聯東京支部の詩歌活動を行った詩友との協同による、ということである。三五年三月の『沙漠の歌』の刊行、五月の『詩歌』の創刊、八月～九月の小熊秀雄との「往復ハガキ詩」の交換等は、その「協同」の成果に數えられる。

三四年三月東京で、雷石檍を含む上記メンバー等によって、東流文藝社が結成され、八月一日、小說・戲曲・詩・文藝時評などを中心とする文藝雜誌『東流』が創刊された。『東流』は、この後創刊される『詩歌』『雜文』と並ぶ、左聯東京支部の主要なる機關誌の一つである。創刊號は雷石檍が編集したという。[7] 他方、日本では、これに先立って、二月一日『詩精神』が前奏社、三月一日『文學評論』がナウカ社から、創刊されている。

雷石檍の詩作は、この東流文藝社設立以後に始まる。雷石檍は、先ず、よく買って讀んでいた『文化集團』へ、日本語の練習の成果を試すつもりで、日本語の詩と譯詩一篇づつを投稿した。[8] 次いで、中國語の詩二篇をつくった。譯詩は『新詩歌』五期（34・1・5）掲載の王一心「嚶兒謠」である。それが掲載されたので、續けて「非上帝の娘」を投稿した。すると、また掲載され、しかも、「編緝ノート」で「人を打つ讀者からの詩九編」の一つとして評價された。そこで、「カフエー」を、今度は、『詩精神』に投稿する。[9] これが、雷石檍と『詩精神』の同人とを結びつける機緣になったのである。

中秋の頃、雷石檍の許に『詩精神』の編集者新井徹から面會したい旨の手紙が屆いた。前奏社を訪れた雷石檍を、新井徹、後藤郁子、遠地輝武が迎えた。經歷を詳しく聞き、『詩精神』の同人になることを勸め、また、投稿詩の掲載も約束した。雷石檍は、三人に持參した自著『在文化鬪爭的旗下』を贈呈した。[10] かくて、彼は『詩精神』の同人になったのである。これは、雷石檍の詩活動に轉機をもたらした。

『詩精神』の同人達は、池袋の大都會飯店で雷石檍の歡迎會を開いた。ここで、年上の詩人大江滿雄、松永浩介と識りあった。歸りに大江は何度も雷石檍の肩を抱いた。『詩精神』では、同人の著作の出版記念會や詩精神懇親會などの小集會を、よく開いた。やがて、雷石檍はこれらの集會にも出席するようになる。集會は、茶話會形式の座談で、會費は五十錢、あちこちと場所を揚え、人に話を聽かれる氣遣いのない階上の部屋を借りて開いたという。各種の小集會には、同人の他にも、作家や評論家達が出席した。雷石檍の記憶には、秋田雨雀・

中野重治・窪川鶴次郎・岡本潤・槇本楠郎・藤森成吉・德永直・森山啓・江口渙等の名が留められている。なかでも秋田雨雀は、日本語を喋り日本語で詩を書く中國の青年に初めて出會ったことに驚き、以後、何かと氣にかけてくれ、このような集會の後は、一緒に歩きながらよく當時の中國の文學界や作家の消息等を話題にしたという。[11] また、森山啓の詩論からは啓發を受け、やがて、飜譯や紹介をするようにもなる。[12] このようにして、『詩精神』を中心とした人達との交遊が次第に深められていくのである。『詩精神』の同人のなかで、最も親身に雷石榆の詩作を助けたのは、年上の、新井徹・後藤郁子・小熊秀雄・遠地輝武等であった。雷石榆には、さらに、『關西文學』の同人でもある大元清二郎、及び、船方一、森谷茂等、同年配の親しい友人もいた。大元は、大阪から上京するとよく雷石榆の下宿に泊まった。東京の森谷との行き來は頻繁であった。[13]

雷石榆の歡迎會から始まって、詩活動の前期に、彼が參加した集會は、『詩歌』創刊記念の會等、左聯東京支部の詩歌活動に連なる中國側の集會を別として、現在判明しているものは以下の如くである。三四年秋「雷石榆歡迎會」、十月三日「遠地輝武出版記念會」、十一月十三日「『一九三四年詩集』出版會」。三五年二月五日「臺灣文藝聯盟東京支部第一回茶話會」、二月二十五日「詩精神一周年記念會」、三月九日「第三回詩精神懇親會」、四月七日「『沙漠の歌』刊行記念會」、七月一日「『小熊秀雄詩集』『飛ぶ橇』出版記念會」、初秋「アメリカの國際メーデー記念會に出席した加藤勘十の報告座談會」。

遠地輝武の『近代日本詩の史的展望』と『石川啄木の研究』の出版を記念した「遠地輝武出版記念會」で、雷石榆は吳坤煌と出會う。吳坤煌は、三四年六月雷石榆よりも早く『詩精神』(1―5／34・6・1)に日本語詩「烏秋」を發表した臺灣の詩人である。三四年五月成立した臺灣文藝聯盟のメンバーで、翌年一月發足するその東京支部の推進力となった人物である。これを機に二人の交遊は深まり、この後創刊される『詩歌』と『臺灣文藝』を舞臺とする互いの詩活動にも發展してゆくのである。[14]「『一九三四年詩集』出版會」は、參加者三十六名、江口渙の冒頭のスピーチから應酬の議論が起き、また、森谷茂の自作の詩の朗讀もあり、「雷石榆・吳坤煌・朱永涉等、中國及殖民地の諸君の氣焔も異彩を添へた」という、熱氣のこもった集會であったらしい。記念寫眞には、『詩精神』の同人達とともに、中原中也・草野心平・窪川鶴次郎・中野重治・北川冬彥・土方定一・植村諦・岡本潤等の顏も並んでいる。[15]「臺灣文藝聯盟東京支部第一回茶話會」は、設立間もない臺灣文藝聯盟東京支部の活動の一環として行われた座談會で、雷石榆は招かれて出席したようだ。誌上出席者は、臺灣文藝聯盟の吳坤煌・賴明弘等と雷石榆の計十名である。三四年十一月五日創刊の機關誌『臺灣文藝』の批判から始まり、途中で雷石榆も求められて發言、當時中國の文學が抱えていた問題について紹介している。[16]『沙漠の歌』刊行記念會については後述する。『小熊秀雄詩集』『飛ぶ橇』出版記念會」は、詩人、小說家、評論家、畫家、勞働者等八十名程が集まり、「中華民國、臺灣、朝鮮の諸君等の多い」大盛會であったという。雷石榆は、自作の詩「小熊秀雄の印象について――小熊秀雄詩集出版記念會にあたる」を朗讀したという。[17] 加藤勘十の報告會は、雷石榆によれば、「文藝に携わる者にとって、創作問題上密接な關係と啓發のあるもの」で、終會後、握手して名刺を交換したという。[18]「詩精神懇親會」は毎月第一土曜日に開かれていた模樣なので、他に、同人として出席していた可能性もある。また、三五年五月五日に開催が

豫定されていた前奏社主催の「詩人祭」で、雷石檍も詩の朗讀をする筈であったが、直前に中止を命じられた爲、實現しなかった。[19]

『詩精神』の同人になってから、雷石檍の詩境は急速に拓けていった。三四年十一月十三日から三五年二月二十日までの約三か月に、日本語の詩二十五篇、中國語の詩五篇をつくっている。連日詩作が續いた時も、日に二三篇つくった時もある。日本語の詩のうち、「細雨」は『文學評論　臨時增刊　新人推薦號』(2—6／35・5・1)に、「あげてよ」は『詩精神』(2—2／35・2・1)に、「顫へる大地」は『臺灣文藝』(2—4／35・4・1)に掲載された。中國語の詩は『東流』に寄稿した。さらに、秋田雨雀の「颶風前奏曲」を譯した。その他、詩壇の紹介もおこない、中國語で「日本詩壇近況」を、日本語で「中國詩壇の近狀」を書いた。[20]

二　『沙漠の歌』

こうして進んでいった雷石檍の詩活動の、最初のエポックを畫するのが、日本語による處女詩集『沙漠の歌』の刊行である。三五年三月下旬、前奏社から内野郁子を發行人として世に出た。發賣所は耕進社である。内容は、上述の三か月に集中して書かれた日本語の詩に、「非上帝の娘」と「カフェー」を加えた二十五篇、これに、遠地輝武・新井徹・後藤郁子の三篇の序と自序がついている。B6版、全九六頁。表紙の裝幀は、棟方志功。やや左より中央に白い太い縦線を置き、その左右を黑と赤で染め分けた、シンプルでダイナミックなデザインである。見返しは黄色。用紙は、「ある特殊會社から仕入れた厚手の紙で相手ごたへのある厚みが出た」[21]というものである。なかを開くと、左側が、著者名と書名を記した扉で、右側左下には、後藤郁子が「序」でいう、「留學生らしく頭髪をキチンと分け」た丸い眼鏡の雷石檍が、左手を顎にちょっと氣取って横を向いた「著者小照」が載っている。前奏社は、新井徹・後藤郁子夫妻の住いに置かれた『詩精神』のささやかな發行所、内野郁子は後藤郁子の本名である。耕進社は、『詩精神』の印刷所であり、前奏社發行の『一九三四年詩集』『一九三五年詩集』の發賣所でもあり、また『詩精神』同人の詩集や論著も出していたところである。棟方志功はこの時、『詩精神』の題字・表紙・カットなどを描いていた。

『沙漠の歌』の二十五篇の詩は、「目次」の順に從って題目を擧げれば、以下の如くである。括弧内は、詩篇についている製作年月日である。——「非上帝の娘」、「カフェー」(34・8・20)、「アスの太陽」(34・11・12)、「ギターを彈く乞食」(34・11・20 夜作 12・19 改作)、「小藝術家(散文詩)」(34・11・23 夜)、「乞食の老人」(34・11 下旬)、「自ら訴へる」(34・12 初旬)、「初雪」(34・12 初旬)、「不自然にあらはれる」(34・12・7)、「二本の足」(34・12・10)「涙」(34・12・13 夜)、「あげてよ」(34・12・14 夜)、「姉さんに(散文詩)」(34・12・17)、「ある詩人たちに(故國の感想の一)」(34・12・18)、「生きる」(34・12・18)、「イトコに」(34・12・18 晩)、「俺は新年がない」(34・12・27 晩)、「良民」(35・1・3)、「三原山繁昌」(35・1・9)、「沙漠の歌」(35・1・16)、「鶯の歌を聽く」(35・1・23)、「燃す」(35・1・26)、「春」(35・1・26)、「包飯作」(35・1・27)、「筆跡」(35・2・6)。「非上帝の娘」の製作年月日は不明。「非上帝の娘」と「カフェー」には、雜誌に發表後手を入れたと、但し書きがある。三か月につくった二十五篇のうち、「細雨」と「顫へる大地」は收錄されていない。また、「三原山繁昌」は、『東流』第一卷第三・四期(35・2・)に掲載されている中國語の詩と同題

であるが、二つの詩を較べてみると、詩の最後の部分と詩篇に付けられた「註」に少しの相違がある。製作年月日は同じである。どちらがどちらの譯ともいい難い。二十五篇の內、二篇の散文詩も含めて、どれもみな短い詩である。ただ、全篇で十數箇所に伏字がある。

實は、『沙漠の歌』には、二種の發行日付がついている。筆者が見た二册の『沙漠の歌』は、內容に違いはないが、奧付にのみ違いがあった。「昭和五年三月十五日　印刷」は同じだが、一つは「昭和五年三月二十日　發行」、一つは「昭和五年三月廿四日　發行」とある。よく見ると「廿四」の二字が左橫に少しずれている。これは何を意味しているのだろうか。日本現代文學の專門家に敎えを乞うたところ、次のようなことが分かったのである。—これは、發行が豫定より遲れた爲の訂正で、少しずれているのは象嵌によるものであろう、納本制度のあった戰前には、印刷と發行の日付を必要とした、檢閱を受ける爲豫想していた日付では納本に閒に合わない場合、發行の日付を訂正するということは、ままあったことである。[22]—『沙漠の歌』には檢閱の跡を留める伏字がある。この詩集發行の三か月程前、『詩精神』十一月號（1—10／34・11・1）が發禁にあっている。[23]雷石榆が『詩精神』に最初に投稿した「カフエー」が揭載された號である。一目して『詩精神』との關係が明らかな『沙漠の歌』に、檢閱の眼が嚴しかっただろうことは、容易に想像がつく。恐らく、檢閱に手閒取り、發行日付の訂正が必要になったのであろう。「殊に新井兄はこの詩集出版のために、手數ながらもあらゆる仕事を背負つて奔走して貰つた」という雷石榆の「自序」と考えあわせると、『沙漠の歌』の誕生は、必ずしも順調とはいえなかったと思われるのである。

二十五篇の詩に歌われている對象は、大略二つになる。一は、虐げられた女、農民、貧者、もの乞い等、人閒としては過酷過ぎる生活を送っている社會的弱者である。一は、蹂躙されつつある祖國をもつ詩人自らの生である。前者は、「非上帝の娘」「カフエー」「不自然にあらはれる」「二本の足」「涙」「あげてよ」「姉さんに」「包飯作」、「イトコに」「良民」、「初雪」「三原山繁昌」、「ギターを彈く老人」「乞食の老人」等、後者は、「アスの太陽」「自ら訴へる」「生きる」「俺は新年がない」「沙漠の歌」「鶯の歌を聽く」「燃す」「春」「筆跡」等である。

前者のうち、最も多いのが、紡績女工、女給、ダンサー、包身工等、賣笑的な或は賣身的な勞働に從事している女達である。次には、父親を亡くし十四の時から小作として働く「イトコ」や、言いがかりをつけられ牢獄にぶち込まれた「良民」なる小作人等、苦しい日々を暮している故郷の親戚や知人達、或は、飢寒に耐えず三原山に飛び込んだ男や、人に振り向いてももらえぬ乞食のギター彈き等、正月の新聞記事や街頭で見聞きした日本の貧者達である。

これ等の對象は、詩にどう捉えられているだろうか。先ず、詩人は、彼等の生命を支えるよすがである生活の樣相を凝視し、その眼光を、實態の背後に隱された本質にまで透徹させる。

「これは——ダンスの利器だつて、それも生活の道具だ。／手を握られて腰を抱かれる。四つの足は互にふざける。／（略）／Jassのリズムは靴の踵の響く音を接吻しつゝ、二つの肉體をはずみ動かしてゐる。／二本の足は生活の道具として、ほかの二本のやつはやるせなさのなぐさみもんだ。／生活の道具であっても、あのやるせなさに姦淫される商品となる。／（略）」（二本の足）。

「（略）／あなたは織機の齒車の廻轉をみまもりつつ／なぜ流行歌で

もうたはないの／あなたの毛穴から汗は流れて臭つてをるのに／薄物も着ず煽風器もなく／あなたの筋肉は繩のやうに疲れてゐるのに／そこにはソーファもないぢやない？／（略）」（非上帝の娘）。

「（略）／併し乍ら、お前の顔は大人のやうにおとなしく／赤つぽい皮膚あれは年寄らしくつやもなし、／あゝどうしたんだか？　お前は十八歳に外ならぬ、／さうだ、俺もよく知つてる／お前は母さんもゐる、三人の弟もゐるが、／一家數人の生活の重荷をこんな低い背と細い手で背負はなくてはならぬぢやないか？／況んや、自分の田は一寸も持たぬ、／又、一季の農作物を何十パーセント租税のために拂つてしまふ／そんな苦しい生活と苦しい働きとは／背を低く抑へただけだらうか？（略）」（イトコに）。

これらの詩の表現には、主情的な詠嘆にもたれたセンチメンタリズムや、絶叫型の悲壯感がないことに氣づく。むしろ、觀察から生み出された形象には、諧謔の風味すらある。

だが、これとは對照的に、その詩の言葉は、打ちひしがれた者に頭を上げよと鼓吹する、詩人の胸いっぱいの情熱に乘せて運ばれているのである。

「あなたの涙は悲しみの汁の溢れて流れるもんだ、／悲しみの貯池である眼玉から流れて落ちるもんだ。／（略）／工場にどつさり搾取されて、長い時間の重荷をおはされることは／あなたの健康を奪つてしまひ、最低限度の榮養料さへも。／あなたの苦しみの堆積をわき出させなけりやならぬか？／さんぜんと流れて落るあの涙は！／だけど、液體を固體にならせられるといふ、／あなたの涙をも煤にさせられるなら／させよ、火で燃しなさい！／生命の闘爭の火で燃しなさい！」（涙）。

「あげてよ！／あなたのたゆたつて下げる顔を。／途中に迷つてゐるあなたの、／暗黑に圍まれるあわたゞしい姿は、／何を考へてるか？／けはしい途を怖れるか？／凶暴な野獸が恐しいか？／――卑怯者はたやすく喰はれるよ！／（略）／おゝたゞ暗黑によろばふあなたは、／――光明を探さなければいよ〳〵暗黑に取りまかれるよ！／（略）／聞け！後の方から追ひ駈ける人々の跫音は炸彈のやうに暗黑をつんざいて來る／見ろ！前の方に振りまはりつつ曾は刃の光をひらめかして行く。／つけて行け、／アケボノはやがて最後の勝利の人々を出迎へる。／人々と共に正しい路筋を押し駈けなければ、／――崖の喉へ落ち込んでしまふ。」（あげてよ）。

「（略）／ギターを彈く乞食、一人の男だ。／髪の毛が長くふさ〳〵と亂れて／萎れた髪の毛には長い年月の塵埃をまとひ／漂泊の苦痛をまじへてゐる、／横顔には髯と鬚が野草のやうに／まつ黑くはえてゐる／蒼ざめた頬の一滴の血をも吸ひ盡くすほどに／緊ぎ垂れるギターの細紐をよごれた襟のもとにかけて／顫へる雙手は何やらをもつて絶えずに、／彈いて、彈いてる、／おゝあの凄じい聲、／まるで巣に餌をもとめる雛鳥の鳴聲、／（略）／あゝあのギターこそ、また泣かせられるかもしれん、／だけど、何を與へられるだらうか？／恐らく絃々に涙さへ出させたとても／甲斐ないことだらう。／強い…器を持たなけりやならねえよ！／生きるためならば。」〈…は伏字〉（ギターを彈く乞食）。

だから、うたわれているのは暗い現實でありながら、讀むものの心

に詩人の體溫が傳わって來るような感じがするのである。詩の基調に在るのは、ないまぜになった現實性と浪漫性の相對する要素であると思う。對象を透視してその本質を確かと認識する眼はリアルであり、虐げられた者に勇氣を鼓吹せんとする情熱は、希望を孕んでいてロマンティックである。この二つの要素の混在は、『沙漠の歌』全篇にわたって指摘出來る、雷石榆の詩の特徴であると考えられる。

詩人自らの生をうたった後者の詩では、この二つの要素はどう表出されているだろうか。先ず、對象の本質を見透すリアルな眼は、詩人自身に向けられるものとなっている。そこで、內省が生まれ、現實に於ける自己の立脚點が確かめられることになる。

「(略)／しかし、覺醒と反省との鞭は／電流のやうに俺を笞韃ちながら、／二年目の異國の生活を送ったが／何の進む力をももち得ないのだらうか／俺の生命の一歲はもう喰ひ込まれてしまった。／一九三五年は更に口をひろげ張り向かって來る／俺はこの新しき一年の背に跨がり／そいつの髭を摑みしめて驅けさせようとしなけりや／やがて海外の第三年目の生命は又喰ひ込まはれてしまはうぢやないか／それまでに考へると／俺の氣持はスチームの中に蒸されるやうだ。」(自ら訴へる)。

次に、弱者に勇氣を鼓吹した情熱は、自らの心を奮い起こす火種になっている。詩人にとっては、それが未來を展望し得る燈となっているのである。

「嵐が吹いて來たら、／ぬっと進めなければならぬ。／暗い夜に月はなくても／火を持つて照らして行く。／(略)／颱風か巨浪かに舟を打ち覆へされたら／あわたゞしくなくおよいで行く。／炸彈が前の方から轟いて飛んで來る時、／お前も生きるために炸彈となってぶつつかれ」(生きる)。

『沙漠の歌』の詩は、ほぼ、制作の順に編集されている。讀み進んでゆくと、日本語の上達の度合と並行するようにして、詩のイメージが詩篇全體にのびやかに廣がってゆく印象を受ける。短期間にうたわれた詩ではあるが、やはり、時間の經過が、詩の表現を深めていると思う。詩集の後半にある「沙漠の歌」は、二つの要素の拮抗の上に結ばれた旅人のイメージによって、今ある、そして、あるべき、自らの人生を傳えており、詩人の生を對象とした詩を代表するものである。雷石榆自身が伏字を起こしたテキストによって全篇を引用しよう。括弧內は、伏字を起こした部分である。[24]

俺は沙漠の中を／驀にすすんでゐる。
あらしの音は／遙かに遙かに／寂しい心を搔きたてる。／俺の空になった胃袋と乾からびた喉とは／貪慾な野獸の食慾を思ひ出す。
砂上に印された無數の跡——／野獸の群は俺の姿を見出したのか／あらしの中に／かすかに牙を磨き爪を研ぐ音が交ぢる。／旋風が／砂柱をなして／俺の上へ振りかぶつて來ても／俺は恐れずに／强く大地を踏みしめて進む。
まもなく、おゝまもなく、／この短い沙漠を過ぎると／到る處に力强い／赤裸な無數の「手」が／俺の手を握つてくれる。
この仲間と一緒に／生活のトラクターを進ませて／俺の疲れた力

をうんと甦らせよう。／野獸の群が俺らに飛びかゝつて來たら／（ハンマーを振りあげて／あいつらをたゝきつぶしてやるんだ！／俺らの勝利のほゝゑみは／高らかにうたふ凱歌の中に）滿ち溢れてゐる。

だが果しない沙漠の中を／さまよふ旅人こそ／いま俺の姿なのだ!!

俺は恐れずに／強く大地を踏みしめて進まう！／いかに嵐が荒れ狂ふとも—。／いかに野獸の牙が鋭くとも—。

旅人のイメージによって寫し出されているのは、自らの置かれている現實を認識し、進むべき方向を見定め、困難な路をも歩もうと決意する詩人の姿である。また、この、我が心を鼓舞しつつ進む旅人は、人としての矜恃を失わぬ者の姿、虐げられた者達に詩人が熱く求め續けた者の姿でもある。二つの意味が重ねられているこの詩は、自らに下した宣言になっている。雷石榆は、この「沙漠の歌」を、詩集の表題としたのである。

『沙漠の歌』は、詩人である自覺をうたった詩「筆跡」で終わる。

「（略）／私の血は百千萬人の慨憤を流してゐる、／私の涙は百千萬人の悲哀をかくしてゐる、／私の胸は崩されつゝ祖國の塊に塞がれてゐる、／私の心は内外の野獸の鋭い爪に摑まれてゐる、／あゝわかつて呉れるだらう、／私の筆跡が／微笑みを浮べないこと。／句ひをもたゞよはせないことを！／私にはちよつとの慰めもなく、／ちよつとのよろこびもないし、／私は未だ悲哀、慨憤、崩される塊とその鋭い爪に壓へられ摑まれてゐるんだから。／おゝ私の筆跡はいつに／微笑みを浮べようか？／句をたゞよはせようか？／百千萬人の喜び高なる歌聲のもとに—。／世界がほがらかな顔にうづまる時に—。」（筆跡）。

これまで、多くの詩人達が世に先んじて抱いてきた苦惱が、雷石榆の詩魂にも宿っていることを知らされる詩である。詩人の胸を塞いでいるのは、「内外の野獸」に恣に踏み荒されている祖國の姿、抵抗のすべなくそこに生をつなぐ者の姿である。二十三歳の青年雷石榆は、このようにして、異國の言葉で初めて表わした『沙漠の歌』によって、異國日本で、詩人となったのである。

三　『沙漠の歌』の受容

詩集『沙漠の歌』の刊行が、どう受け止められたのかを知りうる資料は多くはない。その中で、最も身近な、遠地輝武・新井徹・後藤郁子の序は、内容分量ともに貴重なものである。彼等は、日本語の用法や表現、題材について、雷石榆の詩の特色を次のように述べている。[28]

先ず、雷石榆の日本語表現について、未だ充分な柔軟性をもってはいないのに、詩には「稚拙な言葉につまづきながらほとばしり流れる詩情の熱さ」と「言葉の端々にとらはれぬ汪洋たるリズム」がある（新）、それが「かへつて日本語に新しい現實を與へ」、「日本人に多くの用語上の暗示を與へる」（遠）、と述べる。これは、雷石榆の「未だ充分でない日本語の使驅」（遠）に詩的表現の意外性を發見した言葉である。次いで、日本語詩ではあるが、日本人の詩とは異なる點について、こういう。「その鷹揚な大陸人獨自とも云ひたい歌ひぶりの中に鈍角的な、ねばり強い——それでゐて微笑まずには居られない情緒」が漂い、「非常に眞劍な題材を選びながらどこかにゆとりのある

思惟感情があつて、少しのことにも青筋を立てやすい日本人にとつて羨ましいほどのものがある」（新）、「そこには日本の詩人がこのごろ好んで歌つてゐる不安がない」（遠）。總じて、「抱擁性あるレアルな表現は、物象のすべてに生命をふきこんで、生誕へらせ、一つの宇宙を象づく」っている（後）、ということになる。さらに、題材についてこう指摘する。雷石榆は、その詩で、「我國プロレタリア詩人がまだ充分歌はなかつた資本主義機構内の上層社會の生活暴露を試みたり」、「ブルジョアジーの腐敗した消費場面に犧牲的な勞働をしなければならない女性の惱みを生き〳〵と摘出して來ている」（後）。從來、日本の「プロレタリア詩人の人間性」は、「父のやうな嚴格さ」に於てのみ實現されて、「女性、子供の持つ、もの柔らかさ、單純さの親和力」（後）はその範疇にはなかった。これは、「日本的現實の闘ひのはげしさ」故のものであろうが、一面では、そこにも「家長制度、封建性のカスがひそんでゐる」（後）爲であろう。雷石榆の詩は、そこに「一つの風穴をあけてゐる」のだ（後）。

これらは、雷石榆の詩を、日本人が書いてきた日本語の詩、就中、日本プロレタリア詩の歴史的範疇に置いて見た評言である。雷石榆の詩活動を助けた彼等が、雷石榆が示した詩の世界によって、却て、日本のプロレタリア詩の特質を客觀的に知らされたことを、一面では意味しているだろう。同時代人として詩活動の場を共有した中國の詩人が、日本語によって異質の詩的世界を展開してみせたことに、詩作上の新たな示唆と活力を得、そして、その詩に勵まされたのである。「どんな苦しい境遇に陷つてゐるものでも、此の作者の世界では樂しく鼻歌をうたひながらすすんでゐる。然もその目標は常に前方にある。『沙漠の歌』は實に不安の現代に、みんなを元氣づけ、足並を高ならせてくれる行進曲に外ならない。」（新）

新井徹には、その後も、『沙漠の歌』に言及しているものがある。『詩精神』最終號（2—10／35・12・1）の「詩作家六十四人論」と『東京詩人新聞』（8／36・1・1）の「店頭詩誌　編輯者（紙上）座談會」である。前者では、詩材には「インテリ詩人として最も消化してゐる世界」小市民階級が多いこと、また、「虐げられてゐる女性に對して深い理解を示してゐる」ことを擧げ、「表現に苦心した結果、却つてわれわれ日本人の學ぶべき、詩語の効果を將來してゐる」と指摘している。後者では、『詩精神』誌の一九三五年の「特筆すべき事項」として、『沙漠の歌』の刊行を擧げている。

次には、『詩精神』の同人達による『沙漠の歌』刊行記念會の模様が、『沙漠の歌』が周圍にもたらした波動を、現在に生き生きと傳えている。[26]『沙漠の歌』刊行記念會は、四月七日夜、新宿白十字で開かれた。參會者は、日本人十五名、中國人七名、臺灣人一名、計二十三名。中國人は、雷石榆・駱駝生・林林・陳子鶴・魏晉・蒲風・林煥平。ほとんど左聯東京支部の文藝運動、就中、詩歌の部門で活躍した留學生達である。臺灣人は臺灣文藝聯盟の吳坤煌。日本人は、遠地輝武・新井徹・後藤郁子・森谷茂・榎南謙一等『詩精神』同人達の他に陳方志功・植村諦・北川冬彦等が出席した。「『沙漠の歌』の批評、ひろく詩についての討論など活發な談笑」が續き、中國語と日本語による、意見や感想の發表や詩の朗誦もあった。駱駝生の朗讀した詩は、その抑え難い愛國の情熱が慷慨の調子から傳わってきて、深い印象を與えたという。駱駝生とは、「滿州」から來たある留學生の別名である。[27]彼の故郷は既に日本によって蹂躙されていた。榎南謙一はその日の報告をこう結んでいる。

殊に僕らを喜ばせたものは中國と臺灣の詩人たちが多數集つてくれて、正しい民族的立場からの友情の暖かさを雷氏に注いでくれたことだ。日本語のしやべれぬ某氏が支那語で詩集批判を語ると、日本語のうまい某氏がそれを日本語に飜譯してくれるなど、嬉しい感動が夜のふけるまで僕らをつつんだ。何時かうした會合がブルジョア詩人たちに依つて持たれたことがあつたろうか。僕らの詩のみが國境を超えうることを、その夜いまさらのやうに僕らは自負することが出來た。「沙漠の歌」刊行の意義は實にその點にこそあるのだ。中國から日本にまたがる荒茫たる沙漠――さうした苦しさの只中にあつてなほ綠の草つぱらへたどり着かうとする逞しいその意慾は同じ沙漠の只中にゐる僕らすべてにやはり綠いろの方向を明確に指示してくれるものであらう。その夜會合した中國と臺灣と日本との詩人達は、だからうんと仲よくしてともに仕事を進めたいものだと誓ひ合つた。雷氏にとつてもまたとなく喜びの夜であつたらう。その大陸的な風貌はすこし紅潮さえして、稚拙な日本語でかたるその言葉もはずんで聞かれた。遠地氏のスピーチにはじまり、北川氏のスピーチにをはるまで約四時間カメラの前でみんな肩をよせ合つてから散會したが新宿の舗道を歸つてゆきながらなほ昂奮してゐた僕らであつた。

これは、「荒茫たる沙漠」に身を置く詩人達が、國境を超えて連帶しうる詩精神を確認し得た嬉しさの記錄である。『沙漠の歌』のテーマがもつ國際性が、彼等を勇氣づけたことを示しているだろう。

また、『沙漠の歌』の廣告・批評等から、この詩集の流布の狀態や反響等が斷片的にではあるが推察出來る。『詩精神』には、詩集發行前の三月號（2―3／35・3・1）に、遠地輝武『『沙漠の歌』の著者雷石榆君について』の一文と裏表紙一頁分の廣告が載った。文の內容は、「序」と同じである。廣告の推薦の辭には、こうある。「……この稚拙な言葉につまづきながらほとばしり流れる詩情の熱さ。言葉の末端に捉はれぬ汪洋たる感情のリズム。大陸人にして始めて表現し得る特色ある、茫漠たる正しい意慾のうごめきがある。眞實の歌は未熟な言語をも鞭ち驅使していつしか之を從順ならしめる證左が此處にある。中國人を以てして中國から日本にまたがる廣漠たる沙漠の現世に敢てうたはないでゐられなかつたこの日本語詩集の切實なる歌を聽け！」。『詩精神』は、この後、引き續き何度も廣告や「前奏社出版便り」「前奏社發賣書目」（2―4／35・4・1）等で宣傳に務めた。四月七日の『『沙漠の歌』刊行記念會」の模樣も詳しく記事にした。三六年、『詩精神』が『詩人』に衣替えしてからも、廣告が載った。さらに、筆者の知る限りでは、『文學評論』三月號・四月號・九月號（2―3／35・3・1、2―4／35・4・1、2―10／35・9・1）に、また『關西文學』第二卷第三號（35・9・10）にも廣告を掲載している。

『詩精神』以外の雜誌でも、新刊や受贈書の紹介・批評の欄等で『沙漠の歌』が取り上げられている。『文學評論』五月號（2―5／35・5・1）には、「新刊紹介」欄に短い評を附して書名が掲げられている。『詩人時代』第五卷第五號（35・5・1）には、「受贈詩書紹介」欄で「中國人にして日本人以上にさえ自由詩を書き綴る勝れた詩人に黃瀛氏が既にあるが、著者はより急進的に時代を鬪ひ拔かうとする氣魄がある」と、短い評語をつけた紹介が、また「詩壇消息」欄に『沙漠の歌』刊行記念會の消息が記されている。『詩行動』第一卷第三號（35・5・20）には、局清「三つの詩集について」の中で『沙漠の歌』につ

いての批評が述べられている。これは、上述の「序」や短評や廣告とは異なった觀點からの批評である。要點は、「詩の言葉の拙さにある面白味などはやがて消失すべきなのである」から評價の對象にしてはいけないということである。「讀む人は誰でも言葉の不正確さを當然として容認する爲にそれと同時にある作者の理解の不正確さをも言葉に不慣れの故として見落しやすい」、「著者が中國人であるといふ事を割引せずに讀むことによつてこの詩集の評價は正當に出來る」と述べている。論者には、「作者は先づプロレタリア詩を書かんとする意識に先行されて書いてゐるのではないか」という不滿がある。が、注目すべきは、日本人を主たる讀者とする外國人の日本語詩が必然的に負わねばならぬ問題の存在が、ここで示唆されていることであると思う。また、『中國文學　月報』第四號（35・6・18）でも、「雷石榆氏の新著」としてその出版が報じられている。

以上は、日本語社會での反響であるが、日本語を理解しない者を對象としても、數は少ないが、『沙漠の歌』の出版の消息は傳えられている。先ず、詩集の一部ではあるが、飜譯されている。譯者は全て魏晋、「給某詩人們（祖國的感想之一）」が『臺灣文藝』第二卷第六號（35・6・10）と、『日文研究』第一號（35・7・18）に、「給姉姉（散文詩）」が『詩歌』第一卷第二號（35・6・28）に載っている。[28] また、『詩歌』第一卷第一號「編輯後記」には、『沙漠の歌』が出版され日本詩壇の好評を博していること、駱駝生による中國語譯が近い内に中國で出版の豫定であることが記され、『詩歌』第一卷第二號の「紹介　詩集・詩刊」にも書名が掲載されている。さらに、『夜鶯』第一卷第三期（36・5・10）に「東方文藝　第二期要目　給姉姉　魏晋譯」、[29]『夜鶯』第一卷第四期（36・6・10）に「沙漠の歌　雷石榆著　日本前奏社」と、廣告が掲載されている。

これらの雜誌は、それぞれ趣旨や性格が違う。だが、雷石榆には何かしらの緣がある。その同人や寄稿者同士、いろいろな集會で顔を會わせることがあり、雷石榆もそこに同席し交遊をもっている。『詩精神』や『詩歌』については言うまでもない。詩集の刊行記念會に出席した『詩行動』の同人植村諦も、『關西文學』の同人でもある大元清二郎と同じく、彼の親しい友人であったようだ。[30] 多分、また、そうした交遊の中で、『詩人時代』にも『沙漠の歌』を贈呈したのであろう。『夜鶯』は、日本を追放されて上海に歸った雷石榆が、詩を寄せた雜誌で、他に彼の作品や飜譯書の廣告も載っている。『中國研究　月報』を出していた「中國文學研究會」は、中國からの來訪者や中國人留學生、左聯東京支部のメンバー等との交流があり、例會への出席や月報への寄稿もある。[31] 雷石榆との直接の往來の有無は詳らかではないが、月報には、留學生の雜誌・新聞・著書、演劇の上演等の記事も多い。彼等にとって『沙漠の歌』の刊行は、やはり記錄すべき消息であった。『沙漠の歌』の刊行は、このようにして、雷石榆の詩とひととなりを知る者の輪によって傳わったのである。

結びにかえて
――日本語詩集としての『沙漠の歌』

日本語詩集としての『沙漠の歌』が意味するものは、何か。

雷石榆の日本語は、當時の日本の植民地の作家のように、母語を奪われて强制された言語ではない。意志によって使用した言語である。雷石榆の日本語による詩作は、植民地に於ける日本語文學とは、基本的に異なるのである。雷石榆は、自らの日本語學習をふりかえって、

後進の青年達に、日本語を確實に覺えるには、飜譯をするのがよい、それには、「發表しようという意志」がなければならない、だが、その飜譯が本當に發表出來ると自信がつくまでは發表してはならぬ、と說いている。[32] 確かに、彼の詩作は、日本語への飜譯をきっかけにして始まった。『沙漠の歌』は、發表可能なレベルに達した「練習詩作過程の作品」（「自序」）ということになる。雷石榆にとって、この詩集の公刊が、日本語能力への自信を一層深めたという側面があったことは、否めないであろう。

これを、日本人の側から見たらどうであろうか。『沙漠の歌』誕生の經緯を顧みると、雷石榆が日本語を驅使出來るようになって初めて日本の詩人達との詩的連帶が可能になったことが、指摘出來る。日本語は、彼等の共通語になったのである。この共通語があったから、雷石榆が詩によって發信した時代のメッセージを、日本の詩人達は共感をもって受け止め得たのである。でなければ、日本と中國の詩人が互いに詩想を通わせ、詩精神を共有する等ということは容易ではないだろう。共通語により、彼等の關係は直接的なものとなった。しかも、彼等が用いた共通語としての日本語は、强制・被强制の關係のない言語であった。これは、日本の詩の歷史の上でも特筆すべきであろう。

しかし、共通語が日本の詩人達の母語であったということは、一方、日本語詩を讀む日本人の側に、ある種の錯覺を生ぜしめてもいる。それを指摘しているのが、「言葉の拙さにある面白味」によって、卽ち、言葉遣いの未熟さと詩的表現の意外性とを混同して、雷石榆の詩を評價することに異議を唱えている、局淸の批評であると思う。また、讀者が日本語社會の住人に限られることから、批評にある種の偏向が生じてもいる。『沙漠の歌』に「序」を書いた三人は、日本のプロレタリア詩に稀薄であった新たな要素を雷石榆の詩に見い出し、そこに意義を認めている。だが、當然のこととして、彼等の批評の軸は日本の詩の歷史に據えられており、雷石榆が、中國の詩の歷史によっても育まれていることの觀點は、彼等の批評から缺落している。實はここに、興味深い問題が藏されていると思う。卽ち、作品の使用言語を母語としない作者の作品には、作者を育んだ異文化の反映があって、使用言語を母語とする讀者に新たな價値の發見をもたらすと同時に、讀者がかけている國籍の眼鏡は、讀者の眼から作者の本質のある側面を隱す役目もする、ということである。『沙漠の歌』は、各國文學の範疇には收まらない、また、國語という槪念では律しきれない作品なのである。このことは、二つの異なる文化にまたがる文學の制作や受容を考える上で複眼の視點が不可缺であるという問題を提起している。『沙漠の歌』は、日本や中國という國籍で緣どられた文學の範疇を超えて、交流の十字路にこそ名を留むべき作品なのである。

注

（1） 東亞高等豫備學校は、一九一三年松本龜次郎によって設立、二五年日華學會に移管された。高等敎育を受ける爲の中國留學生に豫備敎育を施した。三五年四月、東亞學校に名稱を變更。（『日華學會二十年史』日華學會 39）／雷石榆は、日本退去の事情からして、中央大學を卒業していないようだ。中央大學の學籍簿に雷石榆の名はない（檜山久雄「日本語詩人雷石榆のこと」『中國文學の比較文學的硏究』汲古書院 83）。八六年來日した雷石榆は、六月十二日中央大學を訪問して講演し「獻給母校—日本中央大學」の詩を朗讀した。（雷石榆「重訪扶桑半紀後」『新文學史料』90—4）。

(2) モルプ支部　日本プロレタリア作家同盟第三回擴大中央委員會「ナルプ解體の聲明」(チラシ　34・2・22／『日本プロレタリア文學全集・別卷』新日本出版社　88)。

(3) 詳しくは、北岡正子「『日文研究』という雜誌(下)—左聯東京支部文藝運動の暗喩」(『中國—社會と文化』第五號　90・6)に既述。

(4) 雷石榆「我的回憶」(『新文學史料』90—2)46頁。

(5) 藏雲遠「〝左聯〟記事」(『左聯紀念集』90・2)260頁。

(6) 北岡正子「『詩歌』の誕生—新詩歌運動の流れ」(『野草』第54號　94・8)。

(7) 雷石榆「訪日期間的兩項文化交流活動」(『日本問題研究』87—2)40頁。

(8) 雷石榆「我在日本參加左翼詩歌運動的日子」(『日本文學』82—1)13頁／雷石榆「略說我學日文的經過」(『青年界』9—5／36・5)120頁。

(9) セキ榆譯　王一心作「霽兒謠—闕名に賣子—」(『文化集團』2—6／34・6・1)／ライセキ榆「非常帝の娘」(初出誌「非常帝」は「非上帝」の誤り)・「編輯ノート」(『文化集團』2—8／34・8・1)／ライセキ榆「カフェー」(『詩精神』1—10／34・11・1)。

(10) 雷石榆「我在日本參加左翼詩歌運動的日子」13頁／雷石榆「新井徹氏の思い出」(『新井徹の全仕事』創樹社　83)562頁。

(11) 雷石榆「訪日期間的兩項文化交流活動」41～42頁／池上貞子「雷石榆氏にお會いして」(『東京新聞』夕刊　81・12・10)／雷石榆「秋田雨雀氏与我們留日進步青年」(『日本文學』82—2　145頁)。

(12) 森山啓「歌ふに値する感情とは何か」(『文學論』三笠書房　35・5・17)を譯出(抄譯)、掲載誌不詳(洪球編『現代詩歌論文選　上』波文書局　75所收)。また、雷石榆「詩的創作問題」(『臺灣文藝』2—8・9／35・8・4)の中で、森山啓「詩における創作方法の問題に關して」(『藝術上のレアリズムと唯物論哲學』文化集團社　33・11・18)に言及し引用もしている。

(13) 雷石榆「訪日期間的兩項文化交流活動」42頁。

(14) 雷石榆「舊夢依稀話寶島」(『新文學史料』93—4)72頁。／吳坤煌(一九〇九—一九九〇)、南投出身。筆名梧棲生。一九二九年日本に留學、日本大學、明治大學に學ぶ。三二年築地小劇場の新劇活動に加わる。同年、臺灣藝術研究會を組織、雜誌『フォルモサ』を創刊。演劇と詩の分野で活躍。(羊子喬「斯人獨憔悴—初論吳坤煌」林衡哲　張恒豪編著『復活的群像　臺灣三十年代作家列傳』前衛出版社　94)／吳坤煌は、「現在的臺灣詩壇」を『詩歌』(1—3／35・8・5、1—4／35・10・10)に、又、林林「鹽」(『詩歌』1—1／35・5・10)の譯詩を『詩精神』(2—8／35・9・1)に寄稿。雷石榆も次の如く、詩、散文、批評等を『臺灣文藝』に寄稿している。「顚へる大地」(2—4／35・4・1)、「飢饉」(2—5／35・5・5)、「我所切望的詩歌」・「書信」(2—6／35・6・10)、「詩的創作問題」(2—8・9／35・8・4)、「和一個異國婦人的對話及其他」(3—2／36・1・28)、「磨碎可憐的靈魂」(3—3／36・2・29)。この時の交友は、互いに後まで影響を及ぼした。

(15) 「一九三四年詩集　出版記念會」『詩精神』(2—1／35・1・1)69頁。

(16) 「臺灣文聯東京支部第一回茶話會」『臺灣文藝』(2—4／35・4・1)24頁。

(17) 新井徹「小熊秀雄出版記念會」『詩精神』(2—8／35・9・1)87頁／雷石榆著　池澤實芳・內山加代編譯『もう一度春に生活できることを』(潮流出版社　95)「雷石榆創作年譜」216頁、詩は未見。

(18) 雷石榆「我在日本參加左翼詩歌運動的日子」14頁／雷石榆「訪日期間的兩項文化交流活動」41頁。

(19) 『詩精神』「編輯後記」(2—5／35・5・1)、／『文學評論』「廣告」

(2—5／35・5・1)、『詩精神』「謝告」(2—6／35・6・1) 31頁。

(20) 『東流』掲載の詩は、紗雨「從那裏飛來」・紗雨「三原山繁盛」(1—3・4／35・2)、玉桑「爽約」・紗雨「雪中祈禱的照片」(1—5／35・4)、紗雨「墓場之傍」(1—6／35・5)。石楡「日本詩壇近況」(『詩歌季刊』創刊號／34・12・15)。ライセキ楡「中國詩壇の近狀」(『詩精神』2—1／35・1・1)。石楡譯秋田雨雀作「颶風前奏曲」(『詩歌雜誌』2／37・2)—未見(劉玉凱輯「雷石楡創作年表」〈『文敎資料』91—3 南京師範大學〉及び、『中國現代文學期刊目錄匯編』による)。

(21) 「前奏社出版便り」(『詩精神』2—4／35・4・1) 93頁。

(22) 祖父江昭二氏の御敎示による。筆者は、祖父江氏御架藏の『沙漠の歌』(昭和十五年三月二十日發行) を借覽させて頂いた。

(23) 「詩界年表」(『一九三五年詩集』前奏社 36〈『社會派アンソロジー集成 下』戰旗復刻版刊行會 84〉) 296頁。／伊藤信吉「一つの詩史—解題として」(『詩精神』解題・回想記」『プロレタリア詩雜誌集成 中』久山社 79) 7頁。

(24) 本論で用いているテキストは、雷石楡氏よりコピーで頂いた『沙漠の歌』(昭和十年三月二十四日發行) である。雷石楡氏の筆跡による伏字を起こした書き込みがある。筆者の見たところ、このテキストは、日本近代文學館に所藏されているものと同じもののように思われる。

(25) 以下、(新) は新井徹、(後) は後藤郁子、(遠) は遠地輝武の「序」からの引用であることを示す。

(26) 『『沙漠の歌』刊行記念會 (榎南謙一 記)」(『詩精神』2—5／35・5・1) 91頁／雷石楡「訪日期間的兩項文化交流活動」41頁。

(27) 駱駝生は、本名仲統生。「滿州國」からの公費留學生。『詩歌』のメンバーとして雷石楡とともに活動。日本で四年間投獄されて追放され、後に天津、石家莊で紡績工場の技師になったという (雷石楡「一九三〇年代日本に留學した中國の若い文學者」—横濱市立大學での座談會〈86・6・18〉發言下書き源稿—手書き)。『詩歌雜誌』(目錄) から、歸國後も雷石楡等と詩歌活動をしたことがうかがわれる。

(28) 『日文研究』掲載分の譯詩には、『臺灣文藝』からの轉載である由の注がある。(『日文研究』第一號 30頁)。

(29) 中國語譯『沙漠の歌』の出版については、現在、確認出來ない。又、『東方文藝』誌未見の爲、譯詩掲載の有無は未確認。

(30) 植村諦については、詩「我記得—懷日本詩友植村諦」(『福建民報・南風』2—1 37・4・12〈雷石楡「我的回憶」『新文學史料』90—2 52頁〉／劉玉凱輯「雷石楡創作年表」16頁)、又「植村諦との交友についての回想記」(雷石楡著 池澤實芳・內山加代編譯『もう一度春に生活できることを』潮流出版社 95 252頁) を書いている。—共に未見。

(31) 『中國文學 月報』第一號 (35・3・5)／第三號 (35・5・16)／「立間祥介編 中國文學研究會年譜」(『復刻 中國文學研究 別冊』汲古書院 71) 參照。

(32) 雷石楡「略說我學日文的經過」120頁。

〈付記〉 本稿執筆のために使用した資料には、故雷石楡氏から戴いた貴重なものが含まれる。雷石楡氏は、筆者の質問にいつも丁寧なお返事を下さり、そこには、筆者のテーマに對する溫かい理解と勵ましの言葉があった。昨年他界された雷石楡先生に、心からなる感謝の念を捧げつつ、御靈の安らかならんことをお祈り申し上げます。

本稿作製に當たり、飯田吉郎、木島始、祖父江昭二、池澤實芳、黃英哲の各氏から頂戴致した、または、借覽致した、貴重なる資料を使用した。また、關西大學圖書館參考課には、資料收集の爲大變お世話になった。ここに記して感謝の意を表わします。